

直言! JAへのメッセージ

「農都共生」のために、食農教育を

林 美香子

(慶應義塾大学大学院 SDM 研究科特任教授)



はやし・みかこ

札幌テレビ放送アナウンサーを経て独立。北海道大学大学院で博士(工学)を取得。慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント(SDM)研究科特任教授、北海道大学大学院農学研究院客員教授でもある。著書に『農都共生のヒント』『農村へ出かけよう』(いずれも寿郎社)など。札幌在住。

農村と都市の共生=農都共生

最近はかつてないほど、各マスコミで、家庭菜園や農産物直売所が話題として取り上げられている。都会の人たちが農業・農村への関心を高めているのは喜ばしいことだ。

もともと「食」に関心のあった私は、北海道大学農学部で学んだ後、放送局にアナウンサーとして入社。退社後は、放送の仕事と同時に、「食と農」「地域づくり」などをテーマに取材・執筆活動を続けてきた。また、北海道大学大学院社会人博士課程で、「農村と都市の共生による地域再生」の研究をし、博士(工学)を取得した。そして、札幌在住のまま、2008年から慶應義塾大学大学院SDM研究科で、農都共生(農村と都市の共生)の研究をしている。都会の学生たちが農村を訪れ、農業者と語らうことも、農都共生の実践と考え、全国の農村視察研修も続けている。

農都共生の推進は、私のライフワークでもあり、各地の講演会でも強く訴えている。都会の人たちには、「農村でゆっくりと過ごす

グリーン・ツーリズムを楽しもう」「農村へ出かけよう」と呼びかけている。一方、農家の人たちには、グリーン・ツーリズムが農村のコミュニティービジネスとして副収入になると同時に、やりがいを高め、農家の応援団づくりの効果もあると話している。

食農教育の大切さ

都会の人たちの安全な農作物への関心の高さ、農的暮らしへのあこがれ……農業・農村への関心が高まっている今だからこそ、農都共生を推進するために、「食育から一歩進めて食農教育へ」と訴えたい。食農教育とは、人が生きていくために必要不可欠な食と、その食料を生産する農業についての学習を、知識だけでなく、体験などを通して五感でとらえて一体的に進める教育のこと。残念ながら、食育に比べるとまだまだ認知度が低い。

工場ではなく、畑や水田、牧場で作られ運ばれてくる農畜産物……このあたりまえのことを知らない子どもたちのなんと多いこと

か。50年ほど前までの日本は、多くの家に庭や菜園があり、家の手伝いや、祖父母・親類とのかかわりのなかから、農的暮らしを自然と体験していった。その後、急激な工業化・高度成長の過程で、農業現場と消費者との距離があまりにも離れてしまった。その間に、「命の育み」「食べ物大切さ」などをどこかに忘れ去ってしまったのかもしれない。人として学ぶべきそうした大切なことを都会の人たちに伝えるためにも、農村側からの「食農教育」のアピールは、これまで以上に必要だ。

テレビ、ゲーム、携帯電話漬けの日々を送っている今の日本の子どもたちにとって、農場・農村での体験はどれほど大切なことか。広々とした農村景観のなかで、土や泥にまみれて行う田植えや稲刈り、芋掘り、牧場で触れる牛のおっぱいの温かさなど生き物の営みは、都会では味わえない貴重な体験である。全国で、子ども農山漁村交流プロジェクトが始まっているが、できれば、1年を通した「本物の食農教育」を体験してほしいと願っている。農村の年中行事や食文化、農家の人の温かさなどをトータルに体験することが大切だ。

全国各地のJAで、青年部や女性部が中心となり、こうした食農教育の取り組みが始まっているのは、とてもうれしいことだ。

北海道など専業農家が多い地域では、農業体験の受け入れは難しいと考える人もいるが、けっしてそんなことはない。農家だけではなく、役場、商業者、地域づくり団体などと連携してはどうだろうか。北海道の米どこ

ろ空知地方には、農業体験の受け入れ農家グループが連携し、地元の観光会社が事務局を担う「そらち DEい〜ね」の活動がある。農家約500軒が、9年間で3万5,000人もの中高生を受け入れているうちに、思いがけない展開につながった。農業体験をした大阪の高校生たちが、「農村滞在の楽しさ」や「とりたての農作物のおいしさ」の感動を親たちに伝えたことがきっかけで、文化祭での産直市が実現したのである。農業体験から農業理解、農業応援に発展したすばらしい事例である。

これからへの期待

今後は、子どもたちへの教育的効果を多角的に検証することも大切だろう。食農教育で元気になっていく様子が、本人の作文や教師の談話で紹介されることは多いが、科学的な視点を取り入れた調査も必要だ。教育や医療、福祉、地域づくりなど多分野の専門家がともに研究を進めることは、食農教育の応援団づくりであり、それは、農業・農村の応援団づくりにもつながっていく。

また、農業者自身も、より質の高い「本物の食農教育」をめざす努力が必要だ。一過性ではない「本物の食農教育」を受けた子どもたちは、将来きっと、農業・農村のよき理解者になっていくだろうと期待している。

農村側が一体となって、都会に対して農業・農村のすばらしさを情報発信し、共感を得ていくことが大切だ。その共感の輪が、農村地帯を元気づけ、日本の農業・農村をしっかりと守っていくことにつながるのだと思う。